

奇跡の友情 板東俘虜収容所

NHK ラジオ
2012年8月18日
あしたのことば

この話は今から百年ほど前の日本・四国にあった実話。このエピソードは「バルトの楽園」として平成18年(2006)映画化されている(松平健が松江所長役)。現在、板東俘虜収容所跡地は「ドイツ村公園」となっている。088-684-1157(鳴門市商工観光課) またこの地は「日本で初めてドイツ人により第九が歌われた場所」でもある。

第一次世界大戦期、1917(大正6)年、日本の徳島県鳴門市大麻町松(旧板野郡板東町)に俘虜収容所が開かれ、約2年10ヶ月間使用された。ドイツの租借地であった青島で、日本軍の捕虜となったドイツ兵4715名のうち、約1000名を収容した。収容所長は松江豊寿陸軍大佐(朝敵の汚名を着せられた会津藩武士の末裔、「敗者の悲哀」を味わい、「武士の情け」を重視)。所長が「捕虜は愛国者であって犯罪者ではないので人道に扱うべき」と主張し、捕虜たちに寛容な待遇を施していたのは有名。

所長松江豊寿とは

「世界のどこに、バンドーのようなラーゲルがあったでしょうか。世界のどこに、マツエ大佐のようなラーゲル・コマンドーがいたでしょうか」板東ばかりでなく、第二次世界大戦時のシベリアでも俘虜生活を送った元俘虜パウル・クライの言葉です。俘虜の間では板東収容所は、「模範収容所」と呼ばれていました。こうした評価とそこにまつわる交流については、松江豊寿所長の管理姿勢を抜きにしては語れません。

松江大佐は捕虜全員を集めたとき以下のように訓示しています。「諸君は祖国を遠く離れた孤立無援の青島で、最後まで勇敢に戦ったが、利あらず日本軍に降伏した。私は諸君の立場に同情を禁じえない。諸君は自らの名誉を汚すことなく、秩序ある行動をとってもらいたい」

松江は最後まで幕府の側につき、朝敵の汚名を着せられた会津藩の出身でした。北辺の下北半島に再建された「斗南(となみ)藩」の生まれではなく、廃藩置県後に戻った会津若松で生を受けています。しかし幼年学校・士官学校を経て長州閥の強い陸軍に進んだ松江は、繰り返して「敗者の悲哀」を味わってきました。松江は上官に抗議して軍法会議にかけられたこともあったそうですが、長男の智寿さんも語っているように、「武士の情け」を重んずる一本気な人でもありました。ことに日韓併合直前の京城での駐さつ軍副官経験なども、敗者の惨めさを学ぶ貴重な場となったのではないのでしょうか。たまたま第1次大戦開戦の年に徳島に赴任した松江に、徳島収容所長の役が回ってきます。そこでの敗者をいたわり、協調性を重んずる管理はアメリカ外交官にも高く評価され、松江は引き続き新設の板東収容所の所長を務めることとなります。

そして松江大佐は驚くような事を始めます。

収容所の正門前に80件もの捕虜たちが経営する店を出したのです。仕立て屋、理髪屋、靴屋、写真館、製本屋、アイスクリームの販売店、家具店などのほか、音楽教室、楽器修理、金属加工や配管工事の店・・・松江大佐は捕虜たちの多くは職業軍人ではなく、手に職をもち、青島や東南アジアで働いていた義勇兵であることを知っており、彼らの知識や技術を活かしたいと考えていたのでした。

捕虜収容所前の土地7000坪を借り上げて運動場を作り、捕虜たちはサッカー場やテニスコート、バレーコート体操場、ホッケー場などを造成します。

空き地には鶏舎や菜園が作られ、ジャガイモやトマト、キャベツ、玉ねぎなどが栽培されます。収穫物は収容所が買い上げ、捕虜たちの食事として給されました。

捕虜たちは吉野川や櫛木海岸で水遊びや海水浴を楽しみます。これを知った陸軍省は激怒。しかし松江大佐は「あれは足を洗わせていたもので、彼らはつい泳いでしまっただけであります」と言ってはぐらかします。

それで櫛木海岸で行われえる水泳大会を「足洗い大会」と称して捕虜と地元民がお祭りを行うようになります。



捕虜たちの外出は引受人さえいれば比較的自由で、地元民はドイツの農業技術や洋酒製造、標本作成、植物採集、気象観測、設計建築、石鹼の作り方、染色などを学び、ドイツ兵捕虜は日本の養蚕や稲作、藍作や焼き物などを学びます。

地元の青年たちが西洋音楽を習いたいという願いを聞いた松江大佐はエンゲル・オーケストラのリーダー、パウル・エンゲルを紹介し、音楽教室を開きます。日本で初めてベートーベン交響曲第九が演奏されたのはこの板東俘虜収容所です。

やがて停戦協定が結ばれ捕虜は日本を去ることになります。松江大佐の命令遵守に感謝するという言葉に対し、通訳や日本語講師を務めたクルト・マイスナーはこう答えました。

「あなたが示された寛容と博愛と仁慈の精神を私たちは決して忘れません。そしてもし私たちより更に不幸な人々に会えば、あなたに示された精神で挑むことでしょう。

『四方の海みな兄弟なり』という言葉、私たちはあなたとともに思い出すでしょう」なんと「四方の海」・・・は明治天皇御製の歌ではありませんか。